

法医植物学者
杠葉柚梨の推理ファイル
花葬犯と謎の画家メント
玄武聰一郎 Soichiro Genbu



アルファポリス文庫

<https://www.alphapolis.co.jp/>

プロローグ

花の絵を描いた。

植物の絵を描くときは、何も考えないことが肝要だ。つい今朝がたに開花した花弁。いままさに咲こうとしている、ふつくらとした蕾。か細くも自立した薄茶けた葉茎。葉の表面にはきめ細かな葉毛がびっしりと並び、霧吹きから受けた水滴を柔らかく浮かせている。数億年の時を経て体系が確立された被子植物、その基本構造に無駄はなく、洗練されている。時に人は、その姿を見て美しいと形容することもあるだろう。

けれど、それ以上の何かが湧きあがることはない。

洗練されたフォルムは、進化の過程を経て形作られた結果にすぎない。

適者生存、自然選択。自然に適した者が生き残り、そうでないものは消えていく。自らの意思があるわけでもなく、流されるままに現在の形に至つただけ。有機物でありながら、無機物のように無機質。ただそこに、「在る」というだけの生物。

だからいい。だから好きだ。
たとえ周囲がどれだけ騒がしかろうとも、誰が笑おうとも、誰が泣こうとも、愛する者同士が恋の情事を始めようとも、くだらない諂いがこじれようとも、戦争が起ころうとも。

そして、そう。

たとえ今、目と鼻の先に、まごうことなく息絶えている女性の死体があろうとも。

植物は変わらない。ただそこに在り続ける。

花は咲いている。蕾は膨らんでいる。葉茎は立ち、葉は水を弾いている。
その様を、ただ描く。スケッチブックの表面に、黒鉛の線が軌跡を残す。

ふと、顔をあげる。モザイク柄の窓の向こうで、サイレンの音が鳴っていた。

朝早く学校へ行く準備をする者たちが、会社への道中を行き急ぐ者たちが、混ざり合い、
それ違う、静かにうるさいこの時間に、確かに生じた警戒の音。
心は少しづわついた。けれど、この場からは動かない。手を止める事もない。
くぐもったサイレンと、黒鉛の先端が削れる音だけが、部屋の中に響いている。

時間がない。だから急ぐ。

植物の絵を描くときは、何も考えないことが肝要だ。

つい今朝がたに開花した花弁。いままで咲こうとしている、ふつくらとした蕾。か細く
も自立した薄茶けた葉茎。葉の表面にはきめ細かな葉毛がびっしりと並び、霧吹きから受け
た水滴を柔らかく浮かせている。
ただひたすらに手を動かして。
花の絵を、描いた。

第一章

かつ丼が好きだ、と僕——神目帯遙は主張した。

白米ととんかつ、たまねぎに卵、それに三つ葉。構成する要素は複数あって、一概にどれが重要かとは言い切れないのだけれど、僕は敢えて出汁の重要性を説いていきたい。なぜかと言えば出汁こそが、かつ丼全体のクオリティを最も大きく変化させると考えるからだ。料理というのは最後に入れた材料によって全体の味が決定する。かつ丼の場合は、白米、とんかつ、溶き卵、出汁の順番に載せられる。溶き卵と出汁は混ざり合っているけれど、卵の風味に出汁の味が負けるわけもない。出汁がまずければかつ丼もまずい。出汁がうまければかつ丼もうまい。要するにそういう話だ。

「というわけで駅前の蕎麦屋のかつ丼が食べたいんですけど、セットにしても大丈夫ですか？」

「ダメに決まつてんだろ。取り調べ中だぞ」

「任意同行ならかつ丼食べられるつてネットに書いてありました」

「確かにそうだ。そうだが、そういうのはこっちから提案するものであつて、断じてそっち側からリクエストするものじゃねえんだよ」

「そうなのか。せつかくあふれんばかりのかつ丼愛をぶつけたのに、残念だ。

「じゃあ、もう話すこともないので帰つていいですか？」

「萩、こいつ舐めてんぞ。お前からもなんかびしっと言つてやれ」

目の前の刑事が（たしか榛原とかいう名前だった）後ろの刑事に向かつて声をかける。僕たちの話を聞きながら逐一P.Cのキーボードに指を走らせ、記録を残していたインテリな見た目の刑事が、眼鏡のリムを指で押し上げながら重々しく口を開いた。

「かつ丼のうまい蕎麦屋なら、商店街にいい店がありますよ」

「てめえ、また話聞いてなかつたな。自分の世界に浸るのも大概にしとけよ」

どうやらインテリっぽいのは見た目だけらしい。普段からこんな感じなんだろうか。だとすれば榛原刑事の気苦労は計り知れない。僕は若干の同情を込めて言う。

「苦労してますね」

「はつ倒すぞボケ」

心配しただけなのに酷い言われようだ。

「もう一度聞くぞ。最初からだ」

仕切り直しとばかりに、榛原刑事が改めて机の上に置かれていた写真を指でつまんだ。僕はもう何度繰り返されたか分からないやり取りに内心うんざりしながら写真を見た。

写っているのは、^{よわい}三十前後と見られる女性だ。黒い髪をサイドテールにまとめ、はにかみながらカメラに向かってほほ笑んでいる。

名木田美鈴、二十八歳。今朝、アパートの自室で亡くなっていることが確認された。

左手首に裂傷が認められ、ぬるま湯を張った洗面器に浸されていた。死因は出血多量によるショック死。死体の周囲には植木鉢が複数置かれていて、大量の花に囲まれた状態で死んでいた。

そして」

榛原刑事の目が、鋭く僕を見つめる。

「死体と花の前に、お前が座つていた。間違いないな」

「二点、訂正があります。花じやなくてワスレナグサ。座つていたんじやなくて、スケッチしていたんです」

「お前がやつたんだろ」

僕の言葉には耳も貸さず、榛原刑事はそう断言した。この場合の「やつた」には「殺つた」という字が当たられるのだろう。そんなことを頭の隅で考えながら、僕は首を横に振った。

「つざけんな！」

「やつてないです」「じゃあなんですぐに通報しなかった」「スケッチしてたので」「つざけんな！」

派手な音を立てて机が揺れる。取り調べが始まつて既に数時間が経過している。なかなか口を割らない僕に、榛原刑事は相当いら立つているようだ。しかし残念なことに（そして榛原刑事にとつては不幸なことに）、僕は一ミリ足りともふざけてなんかいないのだ。警察に連れてこられ、取調室に入つてこの方、僕は本当のことしか口にしていない。

「目の前に死体が転がつてんだぞ！ そんな状況でのんきに花の絵なんて描くやつがいるわけねえだらうが！」

ぐいっと榛原刑事のいかめしい面が近づいてくる。脂ぎった額に刻まれたしわの数まで数えられるくらいの距離だ。ヤニ臭いし、汗臭い。最悪だ。

「いいか、よく聞け。ガイシヤの部屋からはてめの痕跡がわんさか見つかってんだよ。指紋、毛髪、何かとペアでそろえた食器類。右手に握ったナイフからは、べつたりお前の指紋が検出されている。自殺にでも見せかけようとしたんだろうが、処理が雑すぎんだよ。警察なみんなよボケが！」

そう興奮せずに落ちingいて聞いてくださいよ。自殺に見せかけようとしたんじゃなくて、本当に自殺なんです。僕が彼女のアパートに着いたとき、彼女はすでに死んでいたし、それ以上のことは知りません。それに一枚目のスケッチを描き終わつた後、ちゃんと通報したじゃないですか。もし僕が犯人なら、そのまま逃げちゃうと思いません？ よつて僕は犯人じやありません。以上、この話はこれで終わり、解散！

……ダメだな、こんなこと言つたら火に油を注ぐだけだ。もう何度も説明したし、いつになつたら理解してもらえるのだろうかとため息も出るけれど、諦めずにもう一度、ちゃんと弁明してみよう。

「さつきも言いましたけど、彼女に頼まれてたんです。『私が死んだら、この花をスケッチして欲しい』って。だから僕はその通りにしました。彼女の家に着いて死体を確認したら、まずスケッチブックを開きました。それから一番スケッチしやすい場所を探して、ちょうど窓の傍に人ひとり分座れるスペースがあつたので、そこに座りました。あとはいつもの通り、できるだけ平常心でスケッチを——」

「誰が信じるかそんなホラ話！」

まだ最後まで話してないんだけどなあ……

「自分が死んだら花をスケッチして欲しいだ？ そんな意味分かんねえこと頼むやつ、いる

わけねえだろ！」

「だから」

僕はそこで言葉を切つた。これ以上何を言つても無駄な気がした。

そんなやついるわけがない。

常識的に考えてあり得ない。

取り調べが始まつてこの方、ずっとそなへばつかりだ。自分の中にある短い物差しでしか物

事を測れないような人間に、彼女のことを理解してもらえるとは思えなかつた。

「ちよつといいでですか」

このままでは埒らちが明かないと判断したのだろうか。荻と呼ばれた、もう一人の刑事が声を上げた。樺原刑事とは対照的に、きつちり七三に整えられた髪にパリッとしたスーツを着こなしたエリート商社マンのような出で立ち。こんなオンボロ取調室より、全面ガラス張りのオフィスビルが似合いそうな人だ。

「私たちは、なにもあなたの言つてることを頭から否定したいわけじやありません。ただね、どうにも引つかかる点が多いんですよ。たとえスケッチするにしても、警察に通報してからでもよかつたのではないですか？ 知り合いの死体を前にして、やけに冷静だった点も気にかかります。このあたりをしつかり説明してもらわないと、『警察が到着するまでの間に、

証拠を隠滅していたのではないか」と疑ってしまうんですよ」

荻刑事が言い終えると、「そういうことだ」と榛原刑事が仰々しく頷く。その偉そうな態度に若干腹が立つたけれど、せつかく荻刑事が歩み寄ってくれたんだ。こちらの刑事の方が、まだ話が通じそうだし、僕も少し詳しく説明することにする。

「ワスレナグサの横に、自分の死体を添えて欲しいって言つてたので」「死体を添える」

「はい。だから警察も救急車も呼べなかつたんです。彼女の死体が回収されちゃうので」「彼女とはどういう関係か、もう一度説明してもらえますか?」

「深い仲じゃありませんよ。初めて会つたのは三か月ほど前ですかね。それ以来、週一、二回くらいのペースでアパートに。いつも長居はしませんでしたけど」

「なるほど。理解しました」

「理解できるか?」

眉間にしわを寄せる榛原刑事とは対照的に、荻刑事は何度もうなずきながら宙を仰ぎ見た。「ある程度ロジックは通っていますからね。精神的に病んでる人間は、自分が死んだらこうして欲しい、という託し方をよくします。特に生前報われなかつた人間に多いですね。死という行為を、自分の願いをかなえてもらうためのツールとして使うパターンです。彼との出

会いが最近過ぎるのは気にかかりますが……とはいえ名木田美鈴は養子です。もしかしたら家庭環境に何かトラブルでも――」

「おい、喋りすぎだ。授業参観じゃねえんだぞ」

「ああすみません、つい」

心ここにあらず、といった調子で荻刑事が言う。聰明だが、考えに没入すると他人への配慮がなくなる人なのかもしれない。人間関係で摩擦が多くそうな人だが、取り調べを受ける側としては榛原刑事のように声を荒らげない分、ずっとマシだ。

「しかし仮にそうだとしても、まだ完全に納得はできませんね。だってこのスケッチには」ジップロックに入れられたスケッチブックを、荻刑事の手がそつと撫でる。

「花『しか』描かれていない。彼女の願い通り、彼女の死体を添えるのであれば、名木田美鈴の死体も描くべきではないですか?」

実際に理にかなつた質問だった。僕はすぐに答える。

「それも彼女に頼まれたんですよ。自分の姿はスケッチしないで欲しいって。だから花だけ描きました」

「名木田美鈴はどういう意図でその要求を?」

「さあ、知りません。よっぽど大切な花だったんじゃないですか」

「では、なぜそれをあなたに頼んだのですか？　あなたと名木田美鈴は、つい数か月前に出会ったばかりなのでしょう？」

「さあ、知りません。よっぽど僕のことを気にいったんじゃないですか」

荻刑事の顔が少し曇る。申し訳ないけれど、知らないものは知らないのだ。知らないことを知ったように語るよりも何倍もマシだと、僕は信じている。

「……つまり、こういうことですか？　自分が死んだら花を近くに置いておくから、その花だけをスケッチして欲しい。それが名木田美鈴の願いだつた。あなたは彼女の願いを聞き入れて、スケッチした。死体にも動じず、警察にも通報せずに」

「その通りです」

「ふむ。だからさつき、死体『を』添えるという独特な言い方をしたのですね。普通なら、死体『に』添えると『言うところを』あくまであなたたちにとつては花が主体だったわけだ」「そうかもしません」

「証言に『貫性』はありますね。どうします、榛原さん？」

「バカバカしい」

黙つて聞いていた榛原刑事が吐き捨てるように言った。貧乏ゆすりの強さがどんどん増していくので、そろそろかなとは思っていた。

「やれ彼女が言つただの、やれ彼女にお願いされたただの、おんなじことばっかり言いやがつて。死体が喋れねえのをいいことに好き放題か？　ああ？」

僕はほんやりと、どこかで読んだ記事を思い出していた。冤罪(えんざい)についてのコラムだった。

無実の人間が、やつてもいな罪の告白をしてしまうのは、繰り返される尋問に耐えられないからだと、そこには書いてあった。どれだけ屈強な人間も、「否定」と「無意味な時間」に対しては耐性が低い。自分の証言の全てを否定され、意味もなく同じ質問を繰り返されると、その地獄から抜け出すために嘘の真実を語ってしまうのだと。

今僕が、まさにその状態だった。ここまで頭ごなしに否定され続けると、いい加減精神が参ってきていた。もう一度かつ井ネタでもぶち込んで、全部煙(けむ)に巻いてやろうか。「そもそもお前の行動はおかしいんだよ。ガイシャの死亡推定時刻は早朝五時から七時。その時間、お前は何してたつて？」

「スケッチしてました。そこに描いてありますよ」

「これですよね」

荻刑事が手袋をはめてスケッチブックを取り出し、一枚めくる。

「すっかり重要な証拠扱いだ。まいっただね。

「これはなんという花ですか？」

「知りません。あまり植物の名前に詳しくないので」

「どこで描いたんです?」

「横之原町です。駅までの通り道でたまたま見かけて、綺麗だったので描きました」

その花は、誰かの家の玄関先で静かに咲いていた。色とりどりで、形もユニーク、普段公園や川岸で見かけない花だったので、すぐに目に留まつた。その時の場所も、時間も、情景も、つぶさに思い出して語ることができる。ただ――

「それが本当なら、時間的に犯行は不可能ですね。どれだけうまく電車を乗り継いでも、片

道二時間はかかります」

「本当ならな。絵なんて証拠にならん」

樺原刑事の言わんとすることは分かる。写真と違い、絵には時間のデータが残らない。写真の情報ですら偽装できる昨今、なんの変哲もないただのスケッチがアリバイの証明になるとは、僕も思つていなかつた。

「あなたの言い分はこうです。起床が六時。そのあと身支度を整え、六時半に家の周りを散歩。綺麗な花を見つけたのでスケッチ。十五分ほどで書き終え、その足で駅に向かい、二時間ほどかけてガイシャの家に到着。着いたのは九時十分。ガイシャの死体を発見し、スケッチを始める。一枚目のスケッチが書き終わった時点での通報、その十数後、警察が到着し身柄

を確保される。警察を呼ばずにスケッチを始めたのはガイシャの生前の頼みだったから。間違いないですね?」

「はい、その通りです」

「仮にですよ? ガイシャに関することについては、あなたの言つていることが正しいとしましょう。おかしな思想をもつて奇天烈な死に方をする人間は、私もそこそこ見てきましたから」

やつぱり結構失礼だな、この人。

「だとしても、やつぱりこれは無理がありますよ。この二枚のスケッチ。どちらも手掛けた時間が十五分程度ですよね」

「そうです」

「完成度が高すぎます」

「ありがとうございます」

「ははは、褒めてません。いや、褒めてるんですけど、そういうことではなくて」

荻刑事がスケッチブックをめくる。

「こんなの、普通に考えて数時間はかかる書き込み方ですよ。これを十五分で描けるとは到底思えません。あなた、美大生ですか?」

「いえ、ただの大学生です」

「普段からこれくらいの速度で描けるんですか？ 例えば、今」「今は無理ですね」

「どうして」

「ここには植物がないので」

僕の筆が速いのは描画対象が植物の時だけだ。他の絵ではあの速度を出すことはできない。それは僕がここ数年、植物の絵ばかりを描いてきたからなのだけど、別にわざわざ言う必要はないだろう。言つたところで、事実が変わるものではない。

「植物専門の絵描きということですか……まるでメンメントですね」

「メンメント？」

「おや、ご存じないですか？ ネット上で活動している、界隈かいわいでは有名な絵描きですよ。特に海外では熱狂的なファンが多くてですね。彼の描いた絵は最高百万ドルで落札されたこともあるんですよ。おっと、彼というのは正しい三人称ではありませんね。なにせメンメントは正体不明。素顔も性別も年齢すらも明かしていないんですから」

「ついぶん詳しいんですね」

「いやあ、恥ずかしながら私もメンメントのファンでして。画集を買ったこともあるんですよ。

見ます？ 写真フォルダにも何枚か画像が——」

いそいそと荻刑事がスマホを取り出そうとしたところで、樺原刑事の分厚い手が机を叩いた。

「お前の個人的な趣味の話はどうでもいい！」

血管びくわんがブチギレそうな剣幕に、思わず身がすくむ。一方の荻刑事は「う」と、不服そうに唇とがを尖らせながらスマホをポケットにしまっていた。結構凶太い人なのかもしれない。

「いいか神目傭。お前の言つてることは全部でたらめだ！ なんの根拠も証拠もない話を警察がホイホイ信じるとでも思ったのか？ バカにすんじゃねえ！」

「いや、だから——」

「いいか、俺が今からこの事件の真相を話してやる！ まず、その朝一に描いたとかいう絵

は予め準備していたもの。お前は今日の朝、ガイシャの家にいた。そしてガイシャを殺し、そのあと死体の周りに花を並べ、じつくり絵を描いたんだ！ そうだろう！」

「そうじやなくて——」

「殺した理由は痴情ちじょうのもつれ、絵を描いた理由はお前がそういうことに興奮する変態だからだ！ お前みたいなばーっとした顔をしたやつはな、ゲームとか漫画の世界と現実の区別がつかなくなつて、おかしな行動を起こすんだよ！」

ついに僕の話は完全に遮られるようになってしまった。榛原刑事の中でストーリーは出来上がっているらしく、僕はその配役通りに動かないために怒られている。小学校の劇の練習みたいだ。

怒声と机を乱暴にたたく音が、ガンガンと鼓膜こまくを打ち鳴らす。自分は何も悪いことをしていないという確信があるけれど、それでも至近距離で怒鳴どなられ続けるのは、それなりに心にくるものがある。自然に視線は下を向き、体は身を守るかのように、自然に縮こまつっていく。

意識は段々と現実から離れ、思考の海を泳ぎはじめる。

彼女の死体を見つけたとき、すぐに警察に通報しなかつたことに未練はない。

何よりもまずスケッチブックを取り出して、鉛筆を走らせたことに後悔もない。

正しいことをしたという自負がある。

自分は間違っていないという確信もある。

だけど、今の状況は少し——ほんの少しだけ、辛いかも知れない。

「適当にペラペラペラ嘘ばつかり並べやがって！ こっちだつて暇じゃねえんだ！ さつさと全部吐きやがれ！」

「あーれーいいのかなー、天下の国家公務員様がそんなあらっぽい取り調べの仕方して。い

くらここが絶妙に田舎で閉鎖的で警察の横暴が見逃されがちだからって、さすがに任意同行で連れてきただけの相手を変態の犯人呼ばわりするのはいかがなものかと思ひますけどねえ」

取調室の入口に、いつの間にか一人の女性が立っていた。

無地の白いトップスにハイウエストのレザースキニー。まるでバイクにでも乗つて來たかのようなスタイリッシュな服装と、重力に逆らわないまつすぐ長い黒髪。街に出ればあまた数多の目線を吸い寄せそうな極めて攻撃的で整った顔立ち。

壁に寄りかかって腕を組み、挑戦的な目つきで……けれど、やけにけだるげな声音で女性は言う。

「そういう前時代的な取り調べば一つかりしてるから、なかなか昇格できないんじゃないですか？ 榛原刑事つたらもうすぐ四十なのに、昇進の噂の一つもないと署内でもっぱらの評判だそうですねえ。くく、うける」

「……荻、つまみだせ」

「はい」
榛原刑事に指示されて、荻刑事が席を立つた。
しかし。

「これはこれは荻刑事。こんな旧時代の遺物とコンビを組まされて、さぞかし不服なことでしようねえ。同期のみんなは警察庁で華々しく活躍していく、この前も世間を騒がせた連続殺人事件を解決したらしいですよ。あ、失礼、『元』同期でしたっけ」

「……お引き取りを」

「お断りします。私は無知蒙昧なお二人に代わって、一生解決しそうもなく、なんなら今まさに冤罪者を出さんとしている愚かな状況を打破するべく、こうしてわざわざ警察くんだりまで足を運んだんですからねえ。歓喜のあまり足が震えて仕方がないでしょ？ まるで真冬の北海道にいる生まれたてのエゾジカのようだ。そのままひざまずいて拝んでくれたつていいんですよ。想像しただけで実に愉快だ」

「すみません、ここは関係者以外立ち入り禁止ですので……樺原さんがキレる前にお引き取りを——」

「おいこら杠葉あ！」

耐えられんと言わんばかりの怒声と共に、樺原刑事が立ち上がる。

「さつきから黙つて聞いてりや好き勝手言いやがつて。喧嘩売つてんのか？ ああ!?」

「喧嘩なんて売つてませんとも。私はただ、事実を述べているまでで。それを『喧嘩を売つて』いると捉えるのであれば、それはそちら側の問題では？ 何かお心当たりでもあるんで

すかあ？」

「こんのクソ女……毎度毎度偉そうに。いい加減にしねえと——」

「どわああああああ！ 杠葉さん何してんですかああああ！」

この場にそぐわない素つ頓狂な叫び声をあげながら、また一人、女性が部屋の中に現れた。今度の女性はボニー・テールに丸眼鏡、ぶかぶかのパークーに色あせしたジーンズ。なんていふか、生活感のある人だつた。夕方のスーパーで会いそうな感じ。

「何つてご挨拶だよ、八重野君。私は礼儀と仕乗りを重んずる人間だからね、挨拶はコミュニケーションの基本だろ？」

「出会い頭に言葉の鍔器で殴りかかるのを挨拶とは言いません！」

そう言うと八重野と呼ばれた女性は、ショルダーバッグをがさがさと漁ると、一枚の紙を取り出した。

「いつもウチの杠葉がすみません！ これ、署長の許可証です！ いつものやつです！ お求めください、荻刑事！」

広げられたA4の紙には「杠葉ちゃんの話聞いてあげて☆ みんなの署長より」と書いてあった。なんだこのゆるゆるの文言。こんなので部外者が事件に関われるわけ——
「はい、確かに受け取りました。次からは先に見せてくださいね」

「すみません。杠葉さん、いつの間にかいなくなつて……」
いいんだ。これで許されるんだ。

見れば、一番不ツクになりそうな榛原刑事すら渋い顔をしながらも頷いている。すごいな
署長の許可証。みとこうもんいんろう水戸黄門の印籠いんろうみたいだ。

「ちつ、許可が出来るなら早く言いやがれ」

「言いましたがあ？」

「言つてねえよ！」

「言つてないそуд八重野君。もつとしつかりしてくれたまえ」

「え、私ですか!?」

「ああああ、もういい。ぎやあぎやあ騒ぐな、やかましいな」

怒りを吐き出すタイミングを失つたのだろう。不服気に大きなため息を一つ吐くと、榛原
刑事はどうぞりとパイプ椅子に腰かけた。

「さつさと済ませろ」

「言われなくとも、こんな陰気臭いところに長居したくありませんとも」

そう言うとレザースキニーの女性は、僕の目の前に歩を進めた。よく見ると髪の内側は深
緑色だった。彼女が歩き、髪が揺れるたびに、落ち着いた深い緑色の髪がチラチラと顔をの

ぞかせる。インナーカラーってやつか、かつこいいな。

「さて、何から話しあじめたものか。おそらく君は突然の急展開に驚いていることだろう。
分かるとも、鳩が豆鉄砲はとまめでぽうを四方八方から打ちまくられて阿鼻叫喚あびきょうかん、みたいな顔をしている
からね」

「鳩になんの恨みが」

思わず突っ込んでしまつたが、彼女の言う通りだ。正直言つて、何が起つているのかこ
れっぽつとも理解できない。この人が誰なのか、どうしてここに来たのか、なぜ僕に会いに
來たのか……到底分からぬことだらけなのだけど。

それでも一つ、たしかなことは。

「まずは挨拶から。私の名前は杠葉柚梨うり、法医植物学者だ。聞きたいことは色々あるだろう
けど、今はこれだけ理解すればいい。私がここに來た理由はただ一つ」

「遅々として進まなかつた状況が、ようやく動き出しそうだ。」

「君を助けに來たよ、神目帝君」

*

「……今、所持金千円くらいしかないんですけど」

「助けに来たって言つてゐるのになんで金錢をむしり取られる心配をしてるんだ。私たちが野の伏か山賊にでも見えてるのか?」

仕方がないだろう。助けに来てくれたスーパーマンに出会つたというよりは、対価を要求してくる悪魔に出会つた感覺に近い。そんな人間に「助けてやる」と言われても、「今からお前を助ける代わりに身ぐるみを剥ぐ」と宣言しているようにしか聞こえない。

「まあでも、その岡太さはいいね。気に入つたよ、神目帝君。名前もなかなか優雅だし」「はあ」

としか言葉が出ない。確かに珍しい苗字だとは思うけれど。

「神目帝」というのはね、シソ科の植物の名前なんだよ。別名ホーリーバジルとも呼ばれていて、抗酸化作用の高いハーブとして重宝されているんだ。不老不死の靈薬とも言われているね」「へえ」

自分の苗字だけど、それは知らなかつた。どうせどこか辺境にある地名か何かだと思つていた。まさか植物の名前だつたとは。

「これは私の自説だけね、植物の名前が苗字に入つてゐる人間に悪い奴はないのさ。私の杠葉然り、君の神目帝然りね」

「あ、あのう……」

丸縁メガネの女性がおずおずと手を擧げる。

「私はどうでしようか?」

「君はほら、八重つて単語が入つてるからね。おおむね大丈夫だ」

「やつたあ!」

やつたあなの? いやまあ、本人が嬉しいならそれでいいんだけど。

「というわけで、私独自の基準により神目帝君は悪い奴じやない。よつて犯人なわけがない! 以上証明終了お疲れさまでした! さ、帰ろうか神目帝君」

「ちよつと待て」

案の定——といふか当たり前のことだけど、榛原刑事が待つたをかける。

「まさかお前、そんなクソみたいな理由で最有力容疑者を連れてこうとしてんのか? んで

もつてなんでお前もしつと帰ろうとしてんだよ。座れ」

「すみません、無罪になつたのかと思つてつい」

「んなわけあるか、お前もまああとんでもないやつだな」

誉め言葉として受け取つていいのだろうか。あまり褒められた経験がないので、もしかしたら勘違いかもしれない。

「杠葉、お前ふざけんのもいい加減にしろよ」

「私はいつだって真剣ですが」

「俺らがお前みたいなちやらんぽらんなやつに付き合ってやつてるのは、お前がそれなりに結果を残してゐるからだ。殺人事件、強盗事件、窃盜事件、その他もろもろ。癪だが、お前の知恵を借りた事件はことごとく解決してゐる。俺はなあ杠葉、お前の人間性は吐き気がするほど嫌いだが、知識だけは認めてるんだよ」

「あと署長が私のことを気に入っているからでしよう？ 署長に逆らつたら、ますます出世の夢が遠ざかりますもんねえ。やーい、権威主義！」

「すごいなこの人。なんでこんなポンポンポンポン相手を煽るような言葉が出てくるんだ。安直な罵倒や罵声をあげていない分、一層破壊力が高い氣がする。」

「……一回だ。一回でも適当な情報で捜査を邪魔してみろ。捜査妨害でお前のことをしてしおいてやる。それを肝に銘じて発言するんだな」

「こわいなあ、そんな顔して。私としては、警察の皆さんとはもつと仲良くやりたいんですけどねえ。まあ嘘ですけど」

杠葉さんはけだるげに笑うと、取調室の机によいしょと腰かけた。そうして長い足を優雅に組むと、さながら一枚の絵画のような光景ができあがる。タイトルはなんだろう、「傍若無人」とか？

「それじゃあ刑事さんも限界みたいだし、そろそろ証明するとしてどうか。君の無実を」「そんなこと、できるんですか？」

自分で言うのもなんだが、状況はかなり悪いと思う。

僕のアリバイを証明できるものは一切ないし、死体を見つけても通報せず、のんきにスケッチをしていたという怪しい行動も取つてゐる。名木田さんは少なからず面識があつたことも事実で、部屋の中に僕の痕跡が残つてしまつてゐるのも痛手だ。

正直なところ、ここから無実を証明するのは難しいのではないかと思うのだけれど……：「愚問だね、そして余裕だ。君は十分後にはここを出て、外の空気の清々しさに感動してもせび泣いていることだろうさ。今のうちにシャバに出た後、最初に食べたい物のことでも考えておくといい」

「すみません、まだ取調室に来て数時間なので、そこまでの感動的なリアクションは保証できないです」

「さて、刑事さん」

あ、多分あんまり人の話を聞かないタイプだな、この人。

「もう一度、このスケッチブックに描かれている花の絵をよく確認してはもらえませんか

ねえ。名木田美鈴の部屋で描いたものではなく、彼が家の近くで描いたと証言していたこの花の絵。そう、それです。それこそが、彼の無実を証明するものなんですよ」

「バカバカしい」

と、吐き捨てるようになに言う榛原刑事。

「その件についてはすでに検討済みだ。そいつが絵を描いていたところを見たやつはいない。そして目撃証言がない以上、アリバイは成立しない。簡単な話だ」

「はつはあ、実に浅はかな推理ですねえ。浅すぎて浅すぎて、三歳児用の幼児ブールが目の前に具現化したのかと思いましたよ」

「なんだと!?」

「いいですか、重要なのはこの絵が『なんという植物を』スケッチしたのかということです」待つてましたとばかりに杠葉さんがスケッチブックを指さして言う。

「この植物はミスマソウ、別名雪割草とも呼ばれる種です。春先、雪を割って花が咲く様子を表してそう呼ばれているようですよ。実に風流ですよねえ。そしてこの植物の面白いところは」

一拍。

「花の色、そして形が、咲くまで分からぬところです」

「まさか」

と、萩刑事が口をはさんだ。

「花の形なんてどれも同じでしょう。ヒマワリとか、タンポポとか……大体全部同じような形をしてるじゃないですか」

「悪くない指摘ですねえ、最高の合いの手をありがとう萩刑事。無知な人間の質問は、解説の最高のスペースです」

この人は他人と会話するときに一回は馬鹿にしないといけない契約でも結んでるのだろうか、神と。そして刑事の二人は慣れているのか、あまり深く追及せずに杠葉さんの話を聞いている。

いや——聞かされていると言った方が正しいのかもしれない。

杠葉さんの言葉と一挙手一投足には、聞き手を引き込む力があった。

「野生のミスマソウは花弁の色、花弁の枚数、そして花弁に入っている『斑』^{はん}の位置に至るまで、一つとして同じものはないんですよ。例えば花の色は赤から青にかけてグラディエントにうつりかわり、花弁の枚数は六枚から八枚、九枚、時には幾重にも重なることさえある。その多様さゆえに園芸品種としても人気が高く、一昔前は一株数万円の高値で取引されていましたこともあります。ここに来る前に、神目雷君がスケッチしていたというミスマソウを確認

してきました。これがその写真です。八重野君」

「は、はい！ これです！」

八重野さんが慌ててスマホをいじり、二人の刑事に画面を見せた。

そこには確かに、僕が今朝スケッチした花、ミスマソウが写っていた。

「これは……すごいですね」

「どうです、完璧でしょう？ 恐ろしいまでに完璧だ。特に花部の描写が抜群にうまい。まるで写真をトレースしたみたいだ。これが何を意味しているか分かりますか？ 二つとして同じものがないミスマソウの花の様子を、トレースのように描き上げた。これはつまり、彼が間違いなく、事件現場から遠く離れたこのミスマソウをスケッチしていたということの証左に他ならないんです。犯行現場で怪しい行動をしていようが、スケッチの速度が異常だろうがそんなことは関係ないしどうでもいい。彼は事件当時、名木田美鈴の家にはいなかった。つまり彼に犯行は不可能なんですよ。違いますか、荻刑事？」

「それは――」

「おい、惑わされるなよ、荻」

榛原刑事が鋭く釘を刺すように言った。

「たとえそのなんたら草が、花が咲くまで模様や形が分からぬのだとしてもだ。んなもん、

数日前から咲いてたらいつでもスケッチできるだろうが。やっぱアリバイにはならねえよ」
「いえいえ。家の人に確認しましたが、このミスマソウは昨日までは咲いていなかつたそうですよ。この家のご主人はミスマソウの開花を心から楽しみにしておられたようで、毎日毎日写真を撮っていたそうです。ほら、これなんてちょうど昨日の日付」

「……なんで咲いてねえ花の写真まで何枚も撮ってんだよ」

「ミスマソウというのは種子から育てるとい、開花まで数年かかるんです。何年も何年も開花を待ち続け、発芽し、みじゅう実生になり、花茎が立ち上がり、ようやく今年蕾を付けた！ それはもうわが子の成長を見守る思いで、毎日写真を撮り続けても不思議じゃありません」
「だとしてもだ！ この写真は昨日の夕方に撮られてる！ 夜中の間にスケッチしてたかもしけねえだろうが！」

「はははは、さすがベラン榛原刑事、年を取りすぎたせいで小学生レベルの理科の知識も抜け落ちてしまっているようですねえ。最近の小学生の参考書は分かりやすいですか？ ら、一度学び直してはいかがですか？」

「……何が言いたい」

「簡単な話ですよ、榛原刑事。植物の花というのは、一部の種を除き、太陽の光を浴びなければ咲きません。このミスマソウも例に漏れずね」

花は、花粉を媒介してもらうための器官だ。派手な見た目で昆虫をおびき寄せ、種を繁栄させるために花粉をつけて飛んでいってもらう。そして主な昆虫の活動時間が日中である以上、開花の時間もまた、日中である。

そんなことを遠い昔に学んだのを、うっすらと思い出した。

「それにねえ、榛原刑事ご存じですか？」花というのは、咲いたその日から徐々に劣化していくものなんですよ。特に早春に咲く花は傷みやすい。花弁の艶やかさ、雄蕊のみずみずしさ、そして花粉の付き具合からして、このミスミソウが今朝咲いたことは疑いようがない。つまん。つまり、彼にアリバイがあることはゆるぎない事実なのですよ」

榛原刑事と荻刑事は、しばらく何も言わなかつた。

二人してじつとスケッチブックを眺めたまま、口をつぐんでいる。おそらく僕が犯人である可能性を、杠葉さんの主張を加味したうえで再考しているのだろう。

やがて、榛原刑事の言葉を促すようにゆっくりと、荻刑事が口を開いた。

「榛原さん」

「ちつ……：いったん釈放だな」

僕はただ、驚いていた。

何をどう話しても嘘としかとらえられず、客観的に見て最も怪しく、このままいけば嘘の

自白をしてしまいそうになるくらい絶望的な状況だったのに。

この人は植物の知識を使って、あつという間に僕を無実にしてしまつたのだ。

つむじ風のように現れて、場をかき乱し、状況を一変させた。知識、手腕、能弁さ、そしてあふれんばかりの自信。そのすべてに、圧倒された。

「だけど忘れるなよ、神目帝。お前は容疑者リストから完全に外れたわけじゃねえ。あくまで今回は、証拠不十分で釈放つてだけだ。それと、お前は最近の名木田美鈴の情報を知る貴重な人間だ。後日改めて話を聞かせてもらうからな

「もちろんです」

ちゃんと聞いてもらえるのであれば、いくらでも話すつもりだった。僕の持つている情報が、捜査の役に立つかどうかは知らないけれど。

「上々だ。さあ帰ろうか、八重野君、神目帝君」

登場が突然なら、引き際も早い。気付けば僕は一人に連れられて、二度と出られないんじやないかと思つていた取調室からあつという間に解放された。

「あの、杠葉さん。それに八重野さん。今回は本当にありがとうございました。なんてお礼を言つていいか……」

改めてお礼を言う。見ず知らずの僕のために、わざわざ出向いてくれたのだ。感謝してもしきれない。世の中には無償で人を助けることができる、心が清らかな人もいるんだな。最初に見た時、とんでもない対価を要求してくる悪魔に見えてしまった自分をぶん殴りたい気分だった。

この人たちの高潔な姿勢は僕には到底真似^{まね}することはできないけれど、せめて感謝をこめて祈つておこう。

「お礼なんて結構だよ。私は君を助ける。君は私を助ける。ワインワインの関係じゃないか」「ワインワイン……？」

首をかしげる。いつたいなんの話だ？ 僕が杠葉さんの助けになるような話は、出ていかつたはずだけれど。僕が疑問符を浮かべていると、八重野さんがおそるおそる問うてくる。

「も、もしかして、聞いてないですか？」

「何をですか？」

「えーっと、そのお……」

「君のその高い植物のスケッチ能力を活かして、私の仕事の手伝いをして欲しいという話ですよ。言わなかつたか？」

「聞いてないですね」

「聞いてないそっだ。しつかりしてくれたまえ、八重野君」

「えっ、また私ですか!?」

絶対八重野さんのせいじゃないと思う。というか、やっぱり対価を要求されるじゃないか。しかも割と、重めのやつを。僕の第一印象に間違いはなかつた。殴つてごめんな、過去の僕。「あ、あの、どうでしょう……それなりにお手当も出ますし、一度だけでもお手伝いいただけないでしょうか……？」

八重野さんがおずおずと言ふ。

「いや、手伝うも何も……」

そもそも、何をすればいいのかすらピンと来ていない。

杠葉さんは確か、法医植物学者……とか言つてたな。初めて聞いた肩書きだが、警察にもつながりがあるところを見ると、事件の調査を手伝つたりするのだろうか？ 「ま、そういう反応になるのも致し方ないだろう。なんせ私は君に、法医植物学者としての実力の『し』の字も出していいのだから」

それを言うなら『法医』の『ほ』の字じゃないのか？ なんで途中の『植物』からなんだよ。『というわけで、神目昂君、ちよつとうちの事務所まで付いてきたまえ。私の仕事について詳しく述べようじゃないか。君が手伝つてくれるかどうかは、その後で判断すればいい。

どうかな、悪い話じやないとと思うが」

「まあ、それなら……」

「いいか、と思わず頷く。こういうの、ドア・イン・ザ・フェイスつていうんだつけ。大きな要求を最初にして、徐々に要求のレベルを下げていって相手に飲ませる心理学的手法。まんまと術中にはまつた気分だが、あまり深くは考えないことにしよう。

「よし、決まりだな。全然関係ないが、ドア・イン・ザ・フェイスつて言葉は、スタンリー・キューブリック監督の映画『シャイニング』のパッケージを彷彿させると思わないか?」

「アクロバティックな角度から僕の心を読まないでください。普通にびっくりします」
なんだか掌の上で踊らされている気がしなくもないけれど、助けてもらつた恩もある。それなりに報いなければ、礼を失するというものだろう。僕は素直に諦めて、杠葉さんたちについていくことにした。

「どうせ家には帰りたくないし——ちょうどいい。

「さて、それでは事務所まで帰るとするか

「やっぱりバイクですか?」

「いや、リムジンだが?」

その恰好でバイクじゃないんだ。しかもリムジンなんだ。リムジンで送迎される職業なん

て政治家くらいしか思いつかないんだけど。法医植物学者っていうのは、そんなに儲かるんだろうか?

「今、八重野君が車を回してくるてるところだ。私たちはのんびり待つとしよう」

でもつてあの生活感あふれる人がリムジンの運転をするのか……想像つかないな。
いまだに状況の整理ができない僕が、ぼうっとした頭で宙を眺めていると、何を思ったのか杠葉さんが「気になるのかい?」と言う。

「何ですか?」

「とほけるなよ。気になるのも無理はないさ。彼らはこれから大変だらうからね」

「刑事さんたちが、ですか?」

「ああ。なんせ最有力候補の被疑者にアリバイがあつたんだ。捜査は振り出し、しばらくは寝る暇もないだらうね」

「……ちょっと待つてください」

一瞬、背筋に電撃が走ったように、体が硬直した。

今、この人なんて言つた? 最有力の被疑者にアリバイがあつたから、捜査が振り出しに戻る? なんだよ、それ……それじゃあまるで。

「まるで、犯人が別にいるみたいな言い方じやないですか」

「何をいまさら。君が犯人じゃなかつたんだから、他に犯人がいるに決まつてるじゃないか」「そんなはずありません。おかしいですよ。だつて彼女は——名木田さんは、自殺したんですねよ?」

僕が彼女の部屋に入つた時、彼女はすでに絶命していた。

洗面器に付けられた左手首からはおびただしい量の血が流れだしていく、すでに取り返しのつかない量の血が失われていることは明白だつた。右手にはナイフが握られていて、べつとりと血が張りついていた。周囲には大小さまざまな鉢に植えられたワスレナグサが置いてあつて、それはそれは見事に咲き誇つていた。

私は近日中に自殺する。

死ぬときはワスレナグサに囲まれて死のうと思う。
すべて、彼女が生前に言つていた通りだつた。

だから――

「ああ、なるほど。君は彼女が本当に自殺したと思ひ込んでいたんだね。まつたく、私の周りには純粹な人間が集まるね。類は友を呼ぶつてやつかな。神目雷君、後学のためにこれだけは覚えておきたまえ」

杠葉さんは、口元に笑みをたたえて言う。

その赤く薄い唇からは、眞実のみが語られる。そんな気がした。

「確かに彼らは愚鈍で不学で無知蒙昧で、自分の欲を優先したせいでこんな片田舎に飛ばされた二流三流の刑事かもしけないがね。それでも――それでもだ。自殺と他殺を間違えるほどの、大馬鹿者ではないんだよ」

ああ……そうか、そうなのか。

ずっと、気になつてゐることはあつたんだ。

樺原刑事の言葉が脳裏に鮮明によみがえる。

『いいか、よく聞け。ガイシャの部屋からはてめえの痕跡がわんさか見つかつてんだよ。指紋、毛髪、何かとペアでそろえた食器類。右手に握つたナイフからは、べつたりお前の指紋が検出されてる。自殺にでも見せかけようとしたんだろうが、処理が雑すぎんだよ。警察なめんなよボケが!』

僕の痕跡があるのはうなづける。僕は三か月前に彼女と出会つてから、少なくとも毎週月曜の朝には彼女の家を訪ねていた。死んでいるかどうか確認する、ただそれだけの作業のためだ。

41

立ち読みサンプル
はここまで

第二章

あの夜、ペンライトを片手に描いていた植物の名前を、僕が知ることはもうないのだろう。大学二年生になつた頃から、日が暮れても公園や河川敷かせんじょから離れないようになつた。深い理由はない。ただ、家に帰りたくなかったのだ。

家の周りに巨大なN極の磁力をまとつたバリアが張られていて、僕もまた、N極の磁力をまとつた服を着ていて。近づけば近づくほど、撥ねはのけられる力は強くなつて。やがて、反発する力に抵抗することすら億劫おつかうになつて、僕は家から離れる合理的な理由を求めた。外に滞在するための理由。

自分を納得させるための方便。

時間はかかればかかるほどいい。できるだけ金錢を使わず、他人に関わらず、一人だけで完結できる、そんな趣味。絵を描くという行為に行きつくまでに、そんな時間はかからなかつた。

けれど、彼女の部屋に自分の食器を持ち込んだ覚えはない、用意された覚えもない。そのペア食器は、僕の物ではない。
つまり――

「いるよ、間違いなく。彼女を殺した犯人が」
この事件は、まだ終わっていない。